第７課　言語、聖句、文脈

【暗唱聖句】

「この律法の書を取り、あなたたちの神、主の契約の箱の傍らに置き、あなたに対する証言としてそこにあるようにしなさい」申命記 31章 26節

【日曜日・聖書を理解する】

そもそも聖書は何の目的で書かれたのでしょうか。色々な言い方ができるでしょう。「この世界には創造主なる神様がおられ、すべてを導いておられることを伝えるため」「人はどこから来て、何のために生き、そしてどこに向かっているのかを教えるため」「この世界にはなぜ苦難があるのか、この世界には希望はあるのか、この世界はこれからどうなるのか」など、人間が知りたい答えがそこにあるのです。また、罪とは何か、人間はどのように生きるべきなのかという、正しい生き方の指針が書かれてあるという言い方もできるでしょう。テモテへの手紙二3章16、17節には、「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです」と、神の子として正しく生き、整えられるために聖書は有益なことが書かれてあると述べられています。

　また、「あなたたちは、今日わたしがあなたたちに対して証言するすべての言葉を心に留め、子供たちに命じて、この律法の言葉をすべて忠実に守らせなさい。それはあなたたちにとって決してむなしい言葉ではなく、あなたたちの命である。この言葉によって、あなたたちはヨルダン川を渡って得る土地で長く生きることができる」（申命記32章46、47節）と、長く生きるために御言葉が重要であることも書かれてあります。霊的には、神様を信じる者たちが永遠に生きることができるために書かれたということです。そして、このような神様からのメッセージは、最初にヘブライ人に託され、やがてギリシャ文化の台頭により新しい機会がもたらされ、世界中に広がっていくことになりました。

【月曜日・言葉とその意味】

どんな言語でも豊かで深い意味があるので、他の言語に的確に置き換えることは困難です。聖書のヘブライ語やギリシャ語も同様です。その意味を知るためには、同じ言語が他の箇所でどのように使われているのかを調べていくのが有効です。神様のご品性の一つである「慈しみ」という言葉を例にとってみましょう。ヘブライ語では「ヘセド」という言葉が使われていますが、多くの箇所でこの言葉が使われています。たとえばソロモンは主に対して「あなたの僕、わたしの父ダビデは忠実に、憐れみ深く正しい心をもって御前を歩んだので、あなたは父に豊かな慈しみをお示しになりました。またあなたはその豊かな慈しみを絶やすことなくお示しになって、今日、その王座につく子を父に与えられました」（列王記上3章6節）と、父ダビデがその信仰により、主から豊かな慈しみを耐えず受けていたことを言い表しています。慈しみという言葉が使われている箇所を読み比べていくと、

私たちに対する神様の愛の深さや、取るに足らないわたしたちに対する神様の優しさや憐みが深く表現されていることがわかります。また、シャロームというヘブライ語もよく使われていますが、「平安」「やすらぎ」「平和」などと訳されています。しかし、この言葉の意味はもっと深く、「全体性」「完全性」「幸福」などと訳すこともできます。

【火曜日・繰り返し言葉の意味】

聖書の中で、同じ言葉が3回繰り返されていることがあります。これはその言葉を強調したいときに用いる手法で。たとえば、創世記1章27節に次のように書かれてあります。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」

ここに創造された（バーラー）という言葉が3回繰り返し出てきます。バーラーという言葉は、常に神様が主語のときに使われる言葉で、既存の物質に頼ることなく創造されたことを現わしていますが、人間は神様のかたどって、神様の手によって創造されたことが強調されているわけです。また、イザヤ書6:3で「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主」と、神様に対して聖なるという言葉が3回繰り返されています。これも神様がいかに聖なる方であるかが強調されています。イザヤは神様と相対したときに、神様の聖さゆえに滅ぼされてしまうと感じたほどでした。聖書を読むときに、同じ言葉が3回繰り返されているのを見たならば、それはとても重要な御言葉であることを意識すると良いでしょう。

【水曜日・聖句と文脈】

聖書の御言葉は常に文の中で登場します。そのため1つの聖句だけで理解するのではなく、全体の流れ、文脈（背景）の中で理解する必要があります。たとえば、「アダム」について語られているみ言葉を見てみましょう。

「神は御自分にかたどって人（アダム）を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」創世記1：27

ここでは、アダムという言葉は人類の総称として語られています。つまり、人類は神様にかたどって創造され、男と女に創造されたという文脈の中でアダムが登場します。

「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」創世記2章7節

ここでは土の塵から人が創造されたということの中で、男性のアダムだけを指しています。なぜならエバはその後に全く異なる方法で造られているからです。このように2つの章の文脈の中でさえ、アダムという言葉が2つの意味で用いられています。

【木曜日・書巻とそのメッセージ】

聖書の最も大きな構成単位は、聖書の書巻です。それぞれ異なる目的、異なる状況の中で書かれた66の書簡が、一つにまとめられて聖書が構成されています。預言書もあれば、歴史書や手紙、詩篇のような編集されたものもあります。創世記から申命記までの最初の5つの書巻は、モーセが書いたと考えられています。出エジプト記から申命記まではモーセが生きていた時代ですが、創世記については出エジプトの前の羊飼いとして生活していたときに書いたと、エレン・G・ホワイトは言っています。

「モーセは年月の経過とともに羊の群れと寂しい場所を放浪しつつ、民の苦しい状態について考えた。彼は父祖たちを扱われた神の方法や、選民の嗣業として与えられた約束を思い返して、日夜イスラエルのために祈りを捧げた。天使がモーセの周りを明るくてらした。モーセはここで神の霊感を受けて創世記を書いた」希望への光126

この創世記は出エジプトのあと、荒野をさまよう民を大いに励ましたと言われています。